opusdei.org

## 属人区長の書簡 (2013年5月)

属人区長はこの書簡で、主の ご昇天は「神のみ旨へのきないまうに具体化すべきか をどのように具体化すべきか を糾明する」機会である書簡は での祭日と5月中にある祭日 に焦点を合わせています

2013/05/09

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに! 五月になりました。典礼上の祝日や オプス・デイの記念日の多い月で す。私たちの母なる聖マリアの庇護 の下にこの月を過ごしたいと思いま す。聖母はいつも私たちを御子に導 き、私たちは御子によって御子と共 に、聖霊と父なる神に近づくので す。聖母に、私たちを側近くで見 守ってくださるように、又、聖母の ように私たちが慰め主に素直である ためにいつも十二分に恩恵を勝ち得 てくださるようにお願いしましょ う。こうして私たちは御子イエスに ますます似ていくようになるので す。

教皇フランシスコの選出後の数週間、私たちは多くの人々の内的刷新への熱意を目の当たりにしました。 と言うのも数多くの人が、遠さかっていたゆるしの秘跡に再び近づいたり、より頻繁に与かったりするようになっているからです。この賜を神に感謝しましょう。それにはまず、 私たち一人ひとりが信心深くこの賜 を活用することです。それと同時 に、親戚や友人、同僚やクラスメー トたちが

一私たち自身がしなければならないように一 日々、自分の信仰に首尾一貫した生活をするキリスト信者になることを、手伝うよう努めましょう。

クレドの信条に沿って主のご昇天の 秘義を探求することにしましょう。 事実、私たちは、復活されたイエ ス・キリストが「天に昇り、父の右 の座に着いておられる | [i] ことを信 じています。今月9日の木曜日、あ るいは12日の日曜日に祝うことに なっているこの祭日は、皆にとっ て、私たちが招かれている幸せな目 的を思い浮かべつつ、立ち止まる日 になることでしょう。この真実は同 時に、歴史的な事実であり救いのた めの出来事であることを思い起こさ

せます。歴史的な事実であると言う ことは、昇天は「イエスの人性がたれた人性がたれた。 上の神のみ国に決定的に再臨されたれる。 とをですが、それまでは人間のは、ですないます。」 [ii] 今は、おいまで望体に臨在しておお姿でし、その本質的ないます。 す。しかし、その本質りに全いです。 られるのは、世の終わりに全いでよれるのは、世の終わまが見いために、 なる天の国においてのみです。

この出来事をより詳細に述べてでる福音記者は聖ルカです。使徒言行後のはじめに主は「苦難を受けた後多くの証拠をもって使徒たちや他ってもとをしています。と書いています。ことを持っています。ではいます。といます。といます。といます。といます。といます。といます。

シアは苦しみを受け、三日目に死者のうちから復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に述べ伝えられる>と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる』。」[iv]

聖ホセマリアは、この場面を、多人 数が参加した家族の集まりでよく考 察していました。例えば、あると き、復活後の主について考えるよう 勧めました。弟子たちが尋ねた全て のことについて、主は沢山お話しに なりました。今、私たちも少しばか りこれに倣いましょう。あなたがた と私は主の弟子ですから、お互いに 考えていることを話しあいましょ う。| [v] そして他の折にこう付け 加えています。「私たちがここでし ているように彼らにお話になりまし た。全く同じなのです。これこそが 観想であり、神と付き合うことで す。観想と神との付き合いによっ

て、私たちは使徒職の熱意に燃え、神から離れてしまった人たちをキリストの許に連れてくることを渇望するようになります。| [vi]

主は、教会の頭として天に昇られたのです。約束されたように、私たちのために場所を準備されるためでした[ix]。「わたしたちに先んじて御父の栄光のみ国に入られました。こ

うして、そのからだの肢体であるわ たしたちは、いつか、永遠にキリス トとともにいるという希望のうちに 生きることができるようになりまし た。」[x] しかしながら、キリスト とともに栄光のみ国に入るために は、主が歩まれたように生活するこ とが必要です。教皇様は、贖い主と してのいけにえが成就される最後の 過越し祭のためエルサレムに上る主 に注目するよう呼びかけておられま す。「イエスはすでに目的である天 を見つめています。しかしイエスは 次のことを承知していました。父の 栄光への移行は、十字架を通りま す。すなわちそれは、人類に対する 神の愛の計画に従うことを诵るので す。(…) わたしたちもはっきりと知 るべきです。わたしたちのキリスト 教的生活においても、神の栄光に入 るには、日々、神のみ心に忠実に従 わなければなりません。たとえその ことが犠牲や、時として自分の計画 を変更することを求めてもです。|

[xi] 子どもたちよ、キリスト教には十字架が、真実の愛には犠牲がなくてはならないことを忘れてはなりません。私たちの日々の生活がこの喜ばしい現実に適ったものであるよう努めましょう。それは「道であり、いのちである」[xii] 神なる師がなさったように歩むことだからです。

ですから、ご昇天の大祝日は、神の み旨への一致をどのように具体化す べきかを糾明するよう招きます。障 害や自分への執着を振り払い、神の み旨を探し、それを全面的に受け入 れ、全力を傾けてそれを愛する決意 を日々新たにすることです。「神の 御旨への全き従順は自己放棄と奉献 を要求することを主は隠そうとはな さいません。神の愛は権利を要求せ ず、奉仕を望まれるからです。その 道を最初に歩まれたのが主だったの です。イエスよ、御身はどのように 従われたのですか。Usque ad

mortem, mortem autem crucis(フィリピ2,8), 死ぬまで、十字架の死に至るまで。自己の殻から抜け出して、『自分の生活を煩わせ』、神と人々への愛に賭けねばなりません。」 [xiii]

聖書は主の昇天の後、使徒たちが 「大喜びでエルサレムに帰り、絶え ず神殿の境内にいて、神をほめたた えていた | [xiv] と伝えています。そ の二三日前には、イエスが私を見な くなるだろうとお告げになったと き、悲しみに沈んだ彼らですが [xv]、今は、喜びで一杯です。この 変化はどのように説明されるので しょうか。聖霊が見える形で降られ る前にすでに、彼らは信仰の目を もって悟ったのです。「たとえ自分 たちの目から見えなくなっても、イ エスは永遠に自分たちとともにいて くださいます。イエスは自分たちを 見捨てたのではなく、父の栄光のう ちに自分たちを支え、導き、自分た

ちのために執り成してくださいま す。」[xvi]

今も私たちは信仰によって、イエ ス・キリストは、御父と聖霊と共 に、恩恵によって、私たちと共に、 私たちの内に今も居続けて下さるこ と、そしてご聖体におられることを 知っています。私たちの長兄であ り、最も親密な友であるイエス・キ リストは、私たちを決して見捨てる ことはありません。特に苦難に見舞 われるとき、あるいは戦いのとき に、私たちを支え、強めてください ます。「聖ヨハネがヨハネの手紙一 で延べるとおり、イエスは私たちの 弁護者です。これは素晴らしい知ら せです。人が裁判官に召喚され、裁 判を受けるとき、最初にすること は、自分を弁護してくれる弁護士を 捜すことです。わたしたちには、永 遠にわたしたちを弁護してくださる かたがいます。このかたは、悪魔の 誘惑から、わたしたち自身から、私

たちの罪から、わたしたちを守ってくださいます。(…) このかたのとのかたのところに行って、ゆるしを願うのを恐れてはなりません。 祝福とあわれみを願うのを恐れてはなりません。」 [xvii] どんなことが起ころうと、神の現存のうちに過ごすように努めていますか。 神のみ旨を受け入れることができていますか。どれほど熱のに神に呼び求めていますか。

ご昇天の事実からもたらされる、神なる師が私たちに同伴してくださっているという確信によって、私たちは平和と喜びに満たされます。この喜びと平和は、必然的に、私たちが行きかう全ての人、特に、神から離れたことによって、苦しんでいる人たち 一本人はあまり気づいてないかもしれません一

に伝えなければならないものです。 聖ホセマリアがこの祭日について述 べたときに強調しています。「前途

には大きな仕事が待っています。受 身の態度では消極的過ぎます。 [私 が帰るまでこれをうまく使え〕(ルカ 19,13)と、主ははっきりおおせにな りました。主がその王国を完全に所 有するために引き返すのを待ってい る間、手をこまねいているわけには ゆきません。神のみ国を拡げる仕事 は、キリストから神聖な権能を授け られたキリストの代理者となる教会 の聖職者のみが携わるべき課題では ないのです。『あなたたちはキリス トの体である』(1コリント12,27)と いう使徒聖パウロは、最後まで仕事 を続けよと命じています。」[xviii]

今月は多くの国で聖マリアに捧げられた月で、オプス・デイにおいては、いつも、特に使徒職的な月です。創立者は、できるなら友だちや同僚を誘って、エルミタまたは聖母に捧げられた教会に、巡礼することを教えました。皆が、新たなエネルギーに満たされて、日常生活

一仕事や家庭一に携わることができるということを経験しています。私たちの御母は私たちが御子イエスに向かって歩む、あるいは歩みなおすよう取り次いで下さるからです。創立者がアビラのソンソーレスへ行った最初の聖マリア巡礼

一明日がその記念日一と、1970年に教会と教皇様、そしてオプス・デイのために信心を込めて祈ったグァダルペの聖母への忘れがたいノベナ(九日間の祈り)が記憶によみがえります。今年も五月の巡礼では、創立者が今でも天国で持ち続けておられるこれらの意向に固く一致して祈るようにしてください。

今月の中旬、19日は聖霊降臨の祭日、その次の日曜日は至聖三位一体の祭日を祝うことになっています。慰め主は、使徒の時代と同じように今も、そしていつも教会の生活において、信者を強め、あらゆるところ

ーイスラエル民族ではない人々に も、例えばサマリア人に一 教会を拡 大させたのです。聖パウロの宣教旅 行でも同じことが起こりました。

復活節の朗読で思い起こしたこれ等の出来事を考察すると、おのずと自問すべきでしょう。私はキリストへの信仰を証しているでしょうか。特にこの信仰年に、希望と愛徳とともにこの対神徳を強めてくださるよう

神に願っているでしょうか。使徒職 を躊躇させる世間体や障害となるも のをきっぱりと乗り越えているで しょうか。復活されたイエスが、日 常生活のあらゆる小道を私とともに 歩んでおられることを考察すること が、私を大胆にする助けになってい るでしょうか。主と聖母との付き合 いがより信心深いものになるようお 願いするために度々ご聖櫃に近づい ているでしょうか。教皇フランシス コの質問に耳を傾けましょう。「あ なたと私は主を礼拝しているでしょ うか。神に馳せ寄るのは、ただお願 いしたり感謝したりするためでしょ うか。あるいは主を礼拝するために も主に向かっているでしょうか。 (…) 主を礼拝するとは、主にふさわ しいことを差し上げることです。主 を礼拝するとは、単なる言葉の上だ けではなく、私たちの生活の真実の 導き手は唯お一人主であられること を信じ確信することです。| [xx]

先月、レバノンに短い旅行をしまし た。中央アジアの十字路に当たるこ の愛すべき国への旅においても、い つものように、プレラトゥーラの信 者が行っている使徒職を後押しする ための皆さんの助けを頼りにしまし た。Harissa の聖堂では、皆に同伴 されてレバノンの聖母の前で祈り、 特にあそこの全域と全世界の平和を お願いしました。教会と社会のあら ゆる必要のために聖マリアに頼むこ とをあきらめないようにしましょ う。そのことを聖母は、今月末のご 訪問の祝日で私たちに教えて下さっ ています。マリアがいとこのエリザ ベットに仕えたように、どのような 状態においても人々に仕える心をい つも育んでいくことです。

私の意向のため、聖母に願ってください。この頼みは利己的なものではありません。と言うのも、その諸々の意向の中には、あなたがたの喜びと堅忍、聖性への渇望と使徒職の熱

心からの愛を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

ローマ、2013年5月1日

[<u>i</u>] ローマ・ミサ典書、ニケア・コン スタンチノープル信条。 <u>[ii]</u> カトリック教会のカテキズム、 665番。

[iii] 使徒言行録 1,3。

[iv] ルカ 24,46-48。

[v] 聖ホセマリア、1972年10月29日 家族の集まりでのメモ。

[vi] 聖ホセマリア、1972年11月3日 家族の集まりでのメモ。

[vii] ルカ 24,50-51。

[viii] 教皇フランシスコ、2013年4月 17日一般謁見の演説。

[ix] ヨハネ14,2-3参照。

<u>[x]</u> カトリック教会のカテキズム、 666番。

[xi] 教皇フランシスコ、2013年4月 17日一般謁見の演説。 [xii] ヨハネ 14,6。

<u>[xiii]</u> 聖ホセマリア、『知識の香』19 番。

[xiv] ルカ 24,52-53。

[xv] ヨハネ16,6参照。

[xvi] 教皇フランシスコ、2013年4月 17日一般謁見の演説。

[xvii] 同上。

[xviii] 聖ホセマリア、『知識の香』121番。

[xix] 使徒言行録 1,1b。

[xx] 教皇フランシスコ、2013年4月 14日城外の聖パウロ大聖堂での説教

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shu-

## ren-qu-chang-noshujian-2013nian-5yue/ (2025/11/19)